

双月刊行有料宅配誌／編集兼発行人・中村公省

# 蒼蒼

第 113 号

2003年10月10日発行  
宅配料2年12号1000円  
(小額郵便切手可)

株式会社蒼蒼社／東京都町田市森野2-26-16

## 上海・蘇南地域のIT産業

水橋 佑介

(財)交流協会海外提携アドバイザー

中国に数千あるといわれる開発区の頂点に立つ五三の国家級開発区各々の自慢は、『フォーチュン』誌世界五〇〇大企業のうち何社がその開発区に入居しているか、である。上海・蘇南地域にある開発区では、上海外高橋保税區に八五社、金橋現代科技

区五一社、蘇州(シンガポール)工業園區四一社、蘇州新区三九社、無錫新区三〇社、昆山經濟技術開發區一八社といった具合である。これらの国家級開發區に入居している主なIT企業は、日本のソニー、東芝、日立、富士通、シャープ、キヤノン、富士フイルム、NEC、京セラ、三洋電機、松下など、日本以外ではサムスン、インテル、シーメンス、IBM、ソレクトロン、アルカテル、シーゲート、フリップス、ノキア、HP、ADMなどである。

しかし、二一世紀に入って上海・蘇南地域を世界有数のIT製品生産基地に押し上げつつある立役者は、そうしたビッグネームではない。『フォーチュン』世界五〇〇社目の売上げ一〇〇億ドルに達しない規模の台湾企業が、この地域をノート型パソコンの世界的生産地にした。また、集積回路(以下、ICと略称)のウエハ・ファウンドリ(代行生産)産業を勃興させてもいる。華南の珠江デルタがIT製品の一大生産基地となっているのはよく知られているが、珠江デルタでの生産品目はOA機器やデスクトップ型パソコンなどが主力だから、上海・蘇南地域が珠江デルタの後追いというわけではな

表1 電子メーカーの多い開發區

(2002年末現在)

	外資総数	うち日系	台湾系	電子比率
蘇州新区	672	125	186	50%
蘇州工業園區	993	120	275	47%
無錫新区	469	125	123	50%
吳江經濟開發區	329	15	280	95%
昆山	2,300	230	1,150	300社
張江HTパーク	78	n/a	n/a	79%

注：電子比率は総投資額ベース。ただし昆山は社数。蘇州工業園區は、シンガポール合作区以外を含む。

い。むしろ、より技術集約品目が作られるようになってきている。上海・蘇南地域におけるIT産業の集積はまだ日が浅いが、呉江に二工場をもつパソコンとモニターのメーカー大同電子の場合、部品の九割が二時間以内に集まるレベルにきているという。

## (一) ノート型パソコン世界の三分の一を生産

台湾は九〇年代末、対中投資を厳しく抑制していた。すなわち、台湾と中国は「一つの中国」をめぐって対立関係にあるが、台湾政府は、台湾企業が統々大陸に進出して政治的人質になりかねない事態へと突き進むのを阻止すべく、一九九七年にハイテクやインフラ部門への対中投資を規制する措置をとった。しかし、大陸に活路を見出そうとする台湾企業は投資解禁を求める一方、一部には政府の規制を無視した進出も相次いだ。二〇〇一年八月、台湾政府は方針転換に踏み切り、同年末には多くのハイテク品目が解禁となった。そうした動きを先取りして一九九九年後半ごろから増え始めた対中投資は、中国のWTO加盟による国内市場開放を睨んで、上海・蘇

南地域に集中した。

投資解禁の目玉となったのはノート型パソコンだったが、実際に解禁となる二〇〇一年一月までに、台湾のすべての大手メーカーは、許可済みの品目で認可を得てすでに大陸進出を果たしていた。進出先は、昆山輪出加工区五社、蘇州二社、呉江二社、上海二社であった。日本メーカーも東芝、ソニー、シャープがこの地域やその周辺での生産を開始している。二〇〇三年の年初予測では、台湾企業は二三〇万台のうち六割(約一三八〇万台)を、大陸で作ると見込まれている。また、浙江省杭州に一大生産基地を作った東芝は、四月に稼働し、初年度七五万台を生産する。日本のJEITA(電子情報技術産業協会)四月三日発表によると、二〇〇三年の中国におけるノート型パソコン生産は世界の三五%を占めるとの予測だが、そのほとんどが上海・蘇南地域の台湾メーカーの手で生産されることになる。台湾からの生産シフトが続くことから、上海・蘇南地域と杭州におけるノート型パソコン生産の世界シェア五割達成も、二、三年以内に実現するのではなからうか。

## (二) 台湾電子メーカーの城下町

ノート型パソコンは多数の部品を必要とするため、関連業界も統々上海・蘇南地域に集まっている。液晶パネル関係がその最たる例だが、日、韓、台の各メーカーが組立て工場を蘇州を中心とした地域に建設したことから、カラーフィルター、バックライト等の部品メーカーも加わってきている。上海・蘇南地域のモニター・メーカーも、液晶搭載モニターへの転換を急いでいる。液晶パネルでは、台湾メーカーはパソコン用に注力しているが、携帯電話用は、カラーパネルに強い日本のメーカーがノキア、モトローラなどに供給している。

蘇州市区の南約二〇kmのところにある呉江市は、まさに台湾電子メーカーの城下町といつてよい。二一世紀初め、台湾電子メーカーの進出が最も顕著だった地域である。一〇年前につくられた市級の開発区は、現在、進出外資が四〇〇社近く、うち八五%が台湾企業で、しかもそのほとんどが電子メーカーである。一九九五年に同開発区に進出した明基電通の部品調達先一四社を手

がかりに、九〇年代末に、呉江市政府が華南に進出している台湾電子企業を積極的に誘致した成果である。

蘇州市区の東西両翼にある二大開発区（蘇州新区と工業園区）には、台湾の大手メーカーが多数進出している。そのなかで、上述の明基電通は、蘇州新区に従業員八〇〇〇〇余人規模の工場を有し、台湾企業の旗艦的存在である。同社は、台湾のパソコン最大手宏碁電腦（エイサー）の子会社だったが、中国で親会社を凌ぐ成長をとげた。二〇〇二年に改称した英文社名BenQを前面に押し出して、OEMメーカーからグローバルブランドメーカーへの変身を図っている。

蘇州市区から上海方向に向かう地点にある昆山は、九〇年代初めから台湾企業の進出が始まったこともあって、中国で台湾企業が最も密集した所である。ここは、もともと、郷鎮企業による印刷回路板の生産が盛んなところで、台湾の大手四社も加わっている。南亞プラスチック社が巨額の投資を行って最近完成した印刷回路板の工場団地は、銅箔、エポキシ樹脂、ガラス繊維布などの原材料工場を含む大規模なものである。また、この地は、台湾最大手メーカー

鴻海精密の子会社一〇数社が集結している。同社は九〇年代、深圳と昆山を二大生産拠点として世界級のEMS（電子機器の受託生産事業）に成長した。さらに二一世紀に入って、北京と杭州に携帯電話のOEM工場を設けたほか、上海松江でもノート型パソコン最大手の広達電脳やファウンドリ最大手の台湾積体電路のサプライチェーンに加わろうとしている。

日本企業は蘇州新区や無錫新区に多い。大きなところとしてはキヤノン（OA機器）、シャープ（LCD）、エプソン（液晶ディスプレイ）、富士フィルム（デジタルカメラ）、CMK（印刷回路版）、アルプス電子（スイッチ等）、日立マクセル（電池）、村田製作所（コンデンサー）などである。

### （三）超LSI工場が次々に出現

上海最初の電子工業区である漕河涇開発区と江蘇省無錫は、中国IC産業発展の地として知られている。また蘇州工業園区には、世界の大手ICメーカーの後工程工場が多い。しかし、二一世紀に入って台湾企業が中国のIC産業地図を書き換えた。台

湾ではハイテク投資規制のためICの大規模投資は認められていなかったが、規制をいくつかくぐって複数の企業が一社一〇億ドル規模の投資を行い、超LSI工場を建設した。

まず二〇〇〇年後半に、台湾系二社が上海浦東の張江で相次いで八インチ・ウエハ工場建設に取りかかった。うち、中芯国際（SMIC）は二〇〇一年一月に生産を開始しており、二〇〇三年第二・四半期には、生産能力を上回る受注状況になっている。月産能力は現在四万枚だが、設備が計画通り整う二〇〇四年には八万五〇〇〇枚となる。もう一方の宏力半導体（GSMC）は、軟弱地盤の補強に手間取ったこともあり、工場建設の本格的開始が二〇〇二年九月と出遅れたため、二〇〇三年三月ようやく生産体制が整った。次いで二〇〇二年初めに、和艦科技が蘇州工業園区に作った八インチ・ウエハ工場も、二〇〇三年六月にテスト生産に入った。

上記三社はいずれも台湾人が設立した企業である。とくに宏力半導体は、台湾プラスチック董事長王永慶の長男王文洋と江沢民・前中国国家主席の長男江綿恒との提携が話題を呼んだ。一方、中芯国際は、テキサ

スインスツルメンツ社で二〇年のキャリアを有する技術者だった張汝京CEOが、台湾で自ら興したファウンドリが買収されたあと、大陸に転じた。また和艦科技の設立には、台湾I C C二番手聯華電子(U M C)の元従業員六〇余人が馳せ参じた。三社は、いずれも台湾政府の承認を経ない中国進出である。一方、対中投資解禁を待っての進出である台湾最大手台湾積体电路製造(T S M C)は、二〇〇二年五月末に進出先を上海市松江の小昆山に決め、二〇〇四年末完成を目標に、現在、工場建設を進めている。

台湾系以外では、欧州企業と中国企業との合弁二社(上海貝嶺及び上海先進)も、ハインチ・ウエハ工場を建設している。台湾系四社および中国系二社は、いずれもファウンドリ・ビジネス(生産代行)を展開しようとしている。中国初のハインチ・ウエハ工場として、一九九九年にN E Cと中国の合弁で設立された上海華虹N E C電子は、北朝鮮の金正日総書記が訪問したことで有名である。同社は立ち上がり時、技術習熟を目的にメモリーを手がけたが、D R A M価格急落のため、二〇〇二年からファウンドリ化を急速に進めている。これらのファ

ウンドリが稼働すると、中国は、世界のファウンドリ業界の一角を占めることになる。

現在、世界のファウンドリ市場は、台湾の台積電(T S M C)と聯華電子(U M C)の二社が合計六割のシェアを占める。第三位は米I B M、四位はシンガポールのC M Sだが、シェアはそれぞれ数%である。台積電がファウンドリ業界でシェア四〇%と圧倒的な強みを発揮している要因は、積極的な投資によって最先端の製造技術を常に提供してきたことにある。しかし台積電は、中国進出の条件としてウエハ・サイズ八インチ、回路線幅〇・二五μmで、かつ中古設備を使用しなければならぬというハンディを負わされている。また台積電はファブレスからの受注に強みを発揮してきたが、I D M(一貫メーカー)の投資力が低下している現状をみると、今後中国では、I D M向け市場が発展する可能性が大きいと思われる。ファウンドリのセールスポイントは、中国への直接輸出の場合は増値税が一七%かかるが、現地生産(ファウンドリに委託)すれば、増値税が最大一四%還元されることである。

八インチ・ウエハの生産コストを日本と

比較すると、中国は新設設備工場で約一割、中古設備工場で約四割それぞれ安いとされる。高付加価値品が求められる輸出向けは、中芯国際のように新設設備を投入した工場でないとも無理だが、中国国内の需要には中古設備工場でも対応できる。

#### (四) 華東がI C C生産の中心

中国のI C C市場における自給率は、ウエハは六%にとどまっているのに対して、パッケージングは二二%である。これは、世界の主なI D Mが中国で後工程のみを行ってきたことを反映している。中国政府は第八次五カ年計画以来、前工程技術の導入に注力し、第九次五カ年計画では、国策会社として上海華虹N E C電子が生まれた。

現行の第一〇次五カ年計画は、I C C自給率二〇〇五年三〇%、二〇一〇年五〇%を目標としており、そのために五年間で総投資額一〇〇億人民元を必要としている。これに対して二〇〇二年八月までの投資実績はすでに三〇〇億人民元となっている。好調な滑り出しの起爆力となったのは、二〇〇〇年六月の國務院通達によるI C C産業

表2 上海・蘇南地域の8インチ・ウエハー対応ファウンドリ

社名	所在地	稼働状況	月産能力 (単位：枚)	投資額
中芯国際 (SMIC)	上海張江	稼働中	4万	18.6億 <sup>ドル</sup> (注)
宏力半導体 (GSMC)	上海張江	稼働中	2万7千	16.3億 <sup>ドル</sup>
上海華虹 (NEC)	上海金橋	稼働中	3万	12億 <sup>ドル</sup>
上海貝嶺 (Belling)	上海張江	04年末		
上海先進 (ASMC)	上海漕河涇	稼働中	3万	7億 <sup>ドル</sup>
台積電 (TSMC)	上海松江	04年末	4万	第1期9億 <sup>ドル</sup>
漢昇 (Hanson)	上海青浦	04年末	2万	第1期5億 <sup>ドル</sup>
和艦科技 (Hejian)	蘇州工業園区	稼働中	当初5千	10億 <sup>ドル</sup>

注：増資4億ドルを含む。

へのさまざまな投資奨励策で、そのなかには、生産用地の安価提供や、投資額八〇億人民元以上または回路線幅〇・二五 $\mu$ m以下という条件をクリアした場合に適用される「五免五半減」(最初の五年間における所得税免除、六年目から一〇年目まで半減)という破格の優遇措置が含まれている。

中国政府が目標モデルにしているといわれる台湾のファウンドリは、前工程に専念するため上流・下流に企業が集まってくる。二〇〇一年四月に設立された上海市集成電路行業協會(SICA)は中国初のIC産業協會で、上海に所在する二二〇社・団体が所属するが、内訳はウエハ加工メーカー七社、後工程メーカー三〇社、IC設計七〇社、サービス及び設備供給会社三〇社、研究開発投資一五社、光電子四四社などとなっている。台湾政府が依然としてIC設計や後工程の対中投資を禁止していることもあって、台湾企業の進出が抑制されているが、それでも台湾系の会員も少なくない。

上海市政府は、第一〇次五カ年計画の下で、IT産業振興を推進すべく浦東で張江ハイテクパークを中核に、金橋現代科技区から外高橋保稅区までの二二kmを「上海マ

イクロ電子産業基地」と位置づけてきた。そして、ここをICの設計から製造、パッケージング、テストに至る一〇〇社規模の集積地に形成しようとしているが、西部の松江に進出した台積電(TSMC)も、地元松江政府とともに支援している。上海のIC生産基地が市内各所に広がりつつあることを踏まえて、上海市政府は、上流から下流への工場間の円滑な移動に障害となっている増値税の徴収を、「先徴後還」(先に徴収し、後で還付)から、市内の特定地区(浦東・松江・漕河涇など)に限り「即徴即還」(実際には翌月還付)に改めつつある。こうした措置により、上海へのIC産業の集積が一段と加速すると思われる。

上海市集成電路行業協會によると、中国におけるIC生産の地域別割合は、現在、華東が五割を占め、華北が三・四割、華南が一・二割である。台湾勢の投資が上海およびその周辺地域にかなり集中していることから、上海のさらなる発展は確実視される。同協會は、二〇〇五年には華東におけるIC生産の全国シェアは八割になると見込んでいる。

(11月刊行予定の横浜産業振興公社編集協力『上海經濟園情報』(蒼蒼社刊)より抜粋)

中国なるものを考える④

## 黄昏のバックパッカー（前編）

福本勝清

（明治大学教授）

八月三〇日、チェンマイから景洪（シーパンナ）を経て、ようやく昆明に戻ってきた。景洪空港の傍のレストランで、他人が食事中にもかかわらず、平気で痰を吐いているのにムツとして、振り返ると、空港職員（男）だった。中国に帰ってきたことを実感した瞬間だった。

六月八日夜、昆明からチェンマイに向かった時、多分、一月もすれば戻るつもりだった。それが八〇日ほどにもなるとは、自分でも予想していなかった。チェンマイに移らざるをえなかったのは、観光ビザで入り長期ビザに切り替えるつもりが、サーズのとばっちりで、

できなかつたせいである。いろいろ考えた結果、昆明と気候、風土が似ているチェンマイにしばらく居ることにした。

チェンマイについた夜、まったく右も左もわからず、やむをえずタクシーの運転手に、インターネットのチェンマイ紹介記事を閲覧したおり、唯一記憶したゲストハウスの名前を告げ、何とか無事宿をとることができた。そのゲストハウスには片言ではあるが日本語を話す三〇歳前後の女性がいて、僕のことを中年バックパッカーだと思つたらしく、安心の部屋に泊まれという。三百バーツ（一バーツ＝3円）だった。その後も、トレッキング・ツアーに参加しろとか、ゴールデン・トライアングル・ツアーに参加しろと勧められ、仰せにしたがって参加することにした。結局、そこには一〇日ほど逗留することになったが、最初にゲストハウス（いうならば安宿）に泊まったことは、今考えれば幸運だった。タイの旅行事情はゲストハウス抜きには語れないのだが、もう一つ、ゲストハウスは、一種タイ文化をも体現しているように思う。規模が小さいので、家族的であったり、面倒見がよかったり、いろいろ付加価値がある。その後二つのホテルに二〇日ほど泊まったが、

ホテルのなかの世界は、日本、中国と同じで、同じ手続き、似たようなリズムが支配しており、その点では面白味にかけている。

チェンマイに来て一週間ぐらいたつた頃、ゲストハウス内のレストランとかインターネット・ルームとか、外向けの場所で働いている少女（ウエートレス）たちが、日本のアイドルに負けないくらい可愛いことに気がついた。そればかりでない、チェンマイの町を歩くと、立ち並ぶ欧風レストラン、和風レストラン、オーブン・カフェ、オーブン・パブ、カラオケ・バーあるいはインターネット・カフェ、旅行代理店といった外国人と頻繁に接触する場所にいる娘たちも、同じように可愛かったり、チャーミングであったり、旅行書に言う「チェンマイ美人」という表現は、けっして誇張ではない。

チェンマイは、北部タイの中心都市である。だが、街の規模は、多分、昆明の数分の一であろう。やたらと交通量が多く、散歩を十分に楽しめないという点を除けば、自分が思ったとおりの町であった。歯の治療のため、滞在を予定より延ばしたが、それも住み心地がよいためであった。何よりも、ゆつたりとした時間の流れと、人間の

あたりのやわらかさが魅力である。おそろく、それも昆明（というより、雲南）に似ていると感じる点である。そして、きさくで美しい娘たち。残念ながら、素朴な可愛さをもつ昆明の少女たちも、現時点では、チェンマイの娘たちに遠く及ばない。

「チェンマイ」というと、我々の世代には、ある固定したイメージがある。玉本事件（一九七三年）がもたらした後遺症である。玉本事件については、名越健朗『メコンのほとり』（中公新書）を参照していただきたい。それが面倒な方は、インターネットの検索画面から「玉本事件」と入力していただければ、大体のことが分かるはずである。そして、ほとんどの誤解が解けるはずである。僕としては、誤解が続いているかもしれないことを考えると、あまりこのこと（チェンマイの少女たちの話）に触れたくはないのだが、もし一言も触れないとすると、チェンマイの紹介としてはやはり片手落ちということになる。何よりも、数千とか、数万と言われるたくさんの欧米人および日本人の長期滞在者が何故、この町に居住し続けるのかが説明できなくなる。筆者の印象では長期滞在者のほとんどが、中年男性のようにみえるからであ

る。先進国に比べて物価がやすいとか、人々が親切であるといった理由だけでは（定年後の保養地としてチェンマイが注目されているというところは説明できても）、とてもそのことを説明できないだろう。街では欧米人や日本人が若いタイ女性を連れて歩いている光景が当たり前風景として目に飛び込んでくる。僕と同年代（五〇代）の男性が、二〇代前半の女性を連れていたとしても、違和感を感じることはない。

チェンマイで最初にできた友人、オーストラリア人の達林（中国語訳）によると、チェンマイ・ガールは、世界でもっとも美しいそうである。彼は以前シドニーの公務員だった。旅行が好きで欧米も回ったことがある。一九九〇年頃から、東南アジアを旅しているうちチェンマイが気に入って、毎年訪れるようになり、そしてついにチェンマイに居着いてしまった三〇歳代後半の男性である。彼の現在の恋人は二一歳、ビューティフルだと盛んに言う。ある日、偶然、その恋人をオートバイに乗せて走りだそうとしているところに出くわしたが、彼女はローティーンのようにみえた。ポロシャツに半ズボンの彼は、まるで遊び人の叔父さんが

可愛い姪を連れてドライブにでも行くかのような風情に見えた。当時、彼はYMC Aなどで英語を教えていたが、八月にはベトナム（ホーチミン）に出稼ぎに行ってしまった。同じ英語を教えても、ベトナムの方がよい収入を得られると聞いたからであった。それもこれも、チェンマイの彼女を養うためである。

チェンマイでは、和風レストラン（食堂）と台湾レストラン（台湾小館）をよく利用した。というのも、雲南料理の辛さに災いされて、辛いものが食べられなくなったからで、タイ料理も何度か挑戦してみたが、つらくなったので無理をしないことにした。台湾小館の客は日本人と中国人（台湾人と雲南人）が半々ぐらいであったが、老板（*laoban*）は日本人とは口をきかず、いつも中国語で話しかけている僕のことをとても気に入って、知り合いが入ってくるたびに、僕を彼らに紹介していた。

ある日、カラオケに連れて行ってやるというのでお伴をすることとした。多分、定年になったか、首を切られて止むをえず中国とか東南アジアを回っているかわいそうな中年バックパッカーだと思ったのかもしれない。

ない。酒でも飲みながら老板の苦勞話でも聞けるのかと軽い気持ちでついていった僕は、豪華なカラオケ・バーにつき、ロビーでずらりと並んだ美少女たちのなかから気に入った娘を選べといわれ、面食らってしまった。僕に侍っていただいた娘さんは、英語も、日本語もできず、これでは時間をどうつぶすことになるのかと心配したが、父親は雲南人、母親はヤオ族だと聞き、ほっとした。「好」(hao) とか「对」(dai) とかしか言えないのだが、それでも何とか二時間ばかり手振り身振りを交えて過ごした。

雲南人（つまり、解放時に中国から逃れた農民か、タイに残留した国民党軍の兵士たち）とヤオ族とのつながり、そこにどんな歴史が刻まれているのだろうか、ひとしきり考えをめぐらした。そんなおり、老板が雲南人と単なるレストランのオーナーと客以上の関係を持つていることに気がついた。また、僕が借りたアパートの目の前にある雲南会館にも、自分の子どもを中国語の学習のために通わせていたことも知った。

それまで、老板とばかり呼んで、姓名を知らなかったので、ベトナム旅行を思い立ち、

チェンマイを発ってバンコクに行くことを決めた頃、改めて名前を尋ねてみた。これだよ、と自分が書いた本を一冊プレゼントしてくれた。それは、北部タイの農業についての著作で、中国から逃れてきた雲南の農民に、北部タイの風土にあった農耕および農業技術を指導するものであった。彼が農業専門家として台湾から北部タイに派遣されたのか、それとも、チェンマイにやってきた後、なんかの機会に農業専門家になったのか、まだ聞いていない。風土とかエコロジー・システムといったものを実際の体験を通して学びたいと思っていた僕の前に、とっておきの老師 (teacher) が出現したわけだが、自分が定年退職者でもなく、職を失ってやむを得ずチェンマイに流れ込んだ人間ではないことをどう説明しようかと迷っているうちに、チェンマイを離れざるをえなくなってしまう。来年、春か夏、またチェンマイをたずねるつもりだが、先年タイ人の配偶者を失い、毎日のように店に顔を出さなければならぬ老板に、どうやって時間を割いてもらうのか、これもまた難題である。

さて、我々はどうして昆明とチェンマイを似ていると感じるのだろうか。我々というの

は、チェンマイで知り合った、昆明に行ったことのある人間（数人だが）の誰もが、自分と同じ印象を持っていたからである。Dr. マナオこと梅林正直氏の主催する植樹行事に参加した折、出会ったシルバー・ボランティアのO氏は、「この世には天国が三つあって、昆明、チェンマイ、バリの三つだ」と力説していた。僕が昆明から来たというのを聞いて、やたらと最近の昆明の話を書きたがった。O氏は世間知らずだから、三つの天国説を言っているのではない。彼は大企業の一員として、アメリカで一〇年以上、台北で五年以上、働いた経験を持っている。筆者は、バリを知らないで、O氏の説があたっているかどうかどうを言うことはできない。でも、生まれた土地でもないのに、そのまま居着き、ほとんどトレスなしで暮らすことができるという意味で、昆明、チェンマイを並べたのには、同感である。チェンマイ（北部タイ）はタイであり、昆明（雲南）は中国である。彼らのアイデンティティ（認同）はそれぞれタイもしくは中国に向けられている。だが、同じメンタリティを持つと感じるのはどうしてだろう。また、一つ宿題ができたようである。

（九月二十五日昆明にて）



『読売新聞』二〇〇三年九月二七日付朝刊に「中国、北と新関係を目指す」という竹腰雅彦特派員電が掲げられた。曰く、中国共産党対外連絡部の蔡武副本部長は九月二五日、北京で行った記者会見で、北朝鮮の朝鮮労働党との関係について、「改革開放政策の実施以来、一種の新型の政党関係に全力を挙げてい」と語り、「血盟」「兄弟」「同志」の関係などと評される旧来の中朝関係からの脱却を目指す考えを強調した。党の対外関係を所管し、対北朝鮮外交を実質的に仕切ってきた幹部が、北朝鮮との関係の見直しを示唆する発言を公の場で行うのは異例だ。

「改革開放政策の実施以来、一種の新型の政党関係」という表現には、大きな疑問あるいは作偽が感じられる。「改革開放以来」というのは、二〇数年来ということになり、これではこの間の経緯がまるで分らない。

ここで二つの契機を改めて指摘しておきたい。一つは、一九八二―八三年の事件である。一九八二年九月一六日から二五日まで鄧小平

は金日成を四川省に招いた。

一〇日間の金日成訪中は、「国事訪問 State Visit」であったが、この間鄧小平がほとんどフルアテンドしたことで大きな話題になった。鄧小平は金日成を郷里の四川省に招いた。といっても鄧小平は生涯一度も故郷に錦を飾ることをしなかった男だから、この場合も生地の牌坊村には行かなかった。国防三線建設の惨憺たる「成果」を紹介したのだ。毛沢東時代の負の遺産を見せることによって鎮国政策の後遺症を説き、深圳経済特区の意義を説明しようとした。これに対して、金日成は私は老いたので、金正日に委ねる、彼に深圳を訪問するよう指示すると答えたと伝えられる。一九八三年六月、鄧小平の勧めで金正日が「非正式訪問」の形で二日―二日訪中し、深圳経済特区を訪問した。帰国した金正日は、なんと「中国は米帝国主義に屈伏し修正主義に墮落した。中国からもはや学ぶべきものなし」と冷笑した由である。このような深圳訪問記はまもなく鄧小平の耳にも届いた。善意の忠告を無視されて鄧氏は激怒した。金日成は翌八四年一月二六―二八日、「非正式訪問」の形で訪中し、息子の不祥事を鄧小平に詫言た。「友情あふれる説得」さえ、アタで返す北

朝鮮にアイソをつかした鄧小平の選んだ道は、韓国との国交正常化であった。手始めは「スポーツ外交」であり、ソウルオリンピックへの参加であった。当時中ソはまだ関係修復にはいたっていないかったが（ゴルバチョフ訪中は八九年五月）、モスクワもオリンピック参加の点では、中国と同じ歩調をとった。

大韓航空機爆破事件の目的は、北京とモスクワに対するまことに乱暴な警告であった。「韓国は治安の不安定な国だから、オリンピック参加はやめたほうがよい」という警告なのだ。乱暴きわまる暴挙だが、前後の脈絡から見て間違いのない事実だ。中国も旧ソ連も金正日のこのテロ作戦を見破っていたから、オリンピックには堂々と参加した。私はソウルオリンピックの前後にたまたまラッキーゴールドスター社およびサムソン社から相次いで講演旅行を依頼され、訪韓したので、この間の事情に詳しいのである。

その後、韓国の金大中前大統領による太陽政策のもとで南北対話が始まり、北朝鮮も昨年遅ればせながら、脱鎖国・改革開放に転じる気配をみせた。中国国境の新義州に開発区構想を打ち出し、中国人楊斌を長官に指名した。しかし、中国当局はこの男を脱税容疑で

逮捕してしまふ。これはいやがらせの域をはるかに超える。要するに中国から見た場合、やっかいな隣国の姿はこう映るであらう。蔓延する飢餓に有効な対策がなく、政権維持に汲々する金正日政権は、人民公社が失敗して約二〇〇〇万人が餓死した「毛沢東の中国」のイメージと重なるのだ。「主体思想」に依拠して夜郎自大をきめこむ「社会主義の看板を掲げた封建的独裁統治」——中国人はようやく覚めた悪夢に引き戻される気分になる。

これが両国関係の実相であるとすれば、中国・北朝鮮関係の分岐点は一九八二〜八三年と考へなければならぬ。さらに九二年九月の中韓国交樹立がもう一つのメルクマールである。金日成が一九九一年一〇月四日〜三日「正式友好訪問」を行って以来、およそ八年間にわたつて要人の往来は断絶した。金永南が「正式友好訪問」を行ったのは、一九九九年六月三日〜七日のことだ。これら一連の事実を見落として、「血盟」「兄弟」「同志」の関係などと評してきたのが日本のマスコミである。このような新聞を読まされて一億総白痴になっているのが日本の現実である。ここで二つの資料を付しておきたい。一つは、「要人往来にみる中朝関係」〔チャイニーズ・ドラゴン〕二〇〇

三年九月(三日)である——。

八月二七〜二九日、朝鮮半島の非核化をめぐる六カ国協議が開かれた。中国語ではこれを「六方会議」と略称する。北京釣魚台には、わざわざ六角形の会議テーブルをしっかりと、平等な立場で議論ができるように配慮するなど、ホスト役(東道主)の用意周到な気配が目だった。中国の国際協調主義を示すものとして、経済協力における「アセアン+日中韓(いわゆる10+3)への姿勢は、その嚆矢とみてよいが、今回は北東アジアの安全保障をめぐる問題で、よりスケールの大きい枠組み作りに一歩を踏み出したわけである。朝鮮半島の非核化をめぐる「和平プロセス」は第一歩を踏み出したばかりであり、曲折に満ちた長い歩みが予想される。しかし、和平プロセス以外には道がないとすれば、やはり辛抱強く、説得をくりかえし、この過程で新たな緊張を作らない方針で、事を進めるほかあるまい。

ところで今回の一連の報道を通じて、中国と北朝鮮の間の不協和音が目だった。中国と北朝鮮の関係はいったいどうなっているのか。良いのか、悪いのか。どういう関係なのか、といった問い合わせが相次いだ。確かに

「朝鮮戦争を戦つて以来の血で結ばれた戦闘的友誼」といったマスコミのキャッチコピーに惑わされている人々には、理解に苦しむ出来事が再三再四であったと思われる。結論からいえば、中朝関係を半世紀前の朝鮮戦争から語るのは出発点としてまったくの間違いである。

では正しい出発点はどこか。一九九二年八月二四日の中国と韓国の国交を起点としなければならぬ。この日を重要なメルクマールとして、以後約一〇年間に、韓国の要人は一九名が訪中している。「礼は往来を尊ぶ」のが古来の約束事である。中国からは一三名の要人がこれに代えて韓国を訪問している。では中韓国交以後の時期における中朝関係はどうか。北朝鮮から中国を訪問した要人はわずか六名にすぎない。韓国の一九名の三分の一である。では中国から北朝鮮を訪問したのは何人か。わずか七名である。中国から韓国を訪問した要人一三名の約半分にすぎない。往来した要人数を合計すると、中国韓国間のそれは三二名、中国北朝鮮間のそれは一三名である。こうして中国からみて朝鮮半島の南北は、韓国七割、北朝鮮三割のつきあいになる。つまり五分五分どころか、七対三のつき

あいなのだ。このような硬い事実の意味を  
かみしめなければならない。

では三者の経済協力関係、特に貿易関係は  
どうか。昨二〇〇二年の場合、中国の北朝鮮  
への輸出は四・六八億ドル、中国の北朝鮮か  
らの輸入は二・七一億ドル、往復で七・三九億  
ドルであった。他方、同じ年の中国の韓国へ  
の輸出は一五四・九七億ドル、中国の韓国か  
らの輸入は二八五・七四億ドル、往復で四四  
〇・七一億ドルであった。この比率は一对六  
〇である。要人の往来が政治関係のよしあし  
を端的に表現するものである事実を直視し、  
それを重要な判断資料としなければならな  
い。中国と朝鮮半島の貿易関係の数字自体は、  
ときどきマスコミに現れるが、そのもつ政  
治的含意に言及されることは少ない。つまり、  
政治と経済の両国の現実を实事求是の態度で  
的確に把握し、そのうえで初めて安全保障問  
題を論ずることが可能になるわけだ。中朝関  
係の真実の一端を教えてくださいただけでも、「六  
方会議」の意義は大きかった。

もう一つの資料は、中国と北朝鮮、中国と  
韓国の要人往来のリストである。いずれも中  
国外交部が公表したものであり、信頼に足る  
資料である。



茅原郁生編著 拓殖大学国際開発学部教授

# 中国の核・ ミサイル・宇宙戦力



中国は2003年10月にも有人宇宙飛行を実施する予定である。宇宙船が軍事転用されるのは常識であり、戦略核兵器・戦術核兵器を保有する「中国の核・ミサイル・宇宙戦力」の急拡大は、隣国日本として座視し得ないものがある。本書は、日本の専門研究者が叡知を集めて、ボールに包まれたその実態を解明した初めての本格的な研究報告書である。

A 5判上製 521頁 定価：本体 4,300円＋税 ISBN4-88360-032-7 C3330

楊尚昆	主 席	正式友好訪問	1992.4.12-4.17
[92.09]			
1 胡錦濤	政治局常委、書記處書記	中国党政代表团	1993.7.26-7.29
2 羅 幹	國務委員兼國務院秘書長	中国党政代表团	1996.7.10-7.13
3 唐家璇	外 長	友好訪問	1999.10.5-10.9
4 遲浩田	軍委副主席、 國務委員兼國防部長	中国高級軍事代表团	2000.10.22-10.26
5 姜春雲	全國人大副委員長	中国友好代表团	2001.7.9-7.13
6 江沢民	主 席	正式友好訪問	2001.9.3 - 9.5
7 賈慶林	中共中央政治局委員、 北京市委書記	中共党代表团	2002.5.6-5.10

## 中国—韓国要人往来一覽

### 1. 韓国要人の訪中

1 李相玉	外務部長官	工作訪問	1992.8.24
2 盧泰愚	總 統	正式訪問	1992.9.27-9.30
3 韓升洲	外務部長官	正式訪問	1993.10.27-10.31
4 李万燮	議 長	正式訪問	1994.1.6-1.12
5 金泳三	總 統	正式訪問	1994.3.26-3.20
6 韓升洲	外務部長官	正式訪問	1994.6.8-6.9
7 李洪九	總 理	正式訪問	1995.5.9-5.15
8 黄珞周	議 長	正式訪問	1995.12.20-12.26
9 孔魯明	外務部長官	正式訪問	1996.3.20-3.24
10 金守漢	議 長	正式訪問	1997.1.28-2.1
11 柳宗夏	外務部長官	正式訪問	1997.5.18-5.20
12 朴定洙	外交部長官	正式訪問	1998.7.11-7.14
13 金大中	總 統	国事訪問	1998.11.11-11.15
14 李廷彬	外交部長官	正式訪問	2000.4.27-4.29
15 李漢東	總 理	工作訪問	2001.6.19-6.22
16 李万燮	議 長	正式訪問	2002.1.9-1.11
17 崔成泓	外交部長官	正式訪問	2002.3.28-3.29
18 李海瓊	当選總統特使	工作訪問	2003.2.10-2.12
19 尹永寬	外交部長官	正式訪問	2003.4.10-4.12

### 2. 中国要人の訪韓

1 錢其琛	副總理兼外交部長	正式訪問	1993.5.26-5.29
2 李嵐清	副 總 理	友好訪問	1993.9.27-10.3
3 李 鵬	總 理	正式訪問	1994.10.31-11.4
4 喬 石	全國人大委員長	正式訪問	1995.4.17-4.12
5 江沢民	国家主席	国事訪問	1995.11.13-11.17
6 尉健行	全國總工會主席	友好訪問	1996.4
7 胡錦濤	国家副主席	正式訪問	1998.4.26-4.30
8 李瑞環	全國政協主席	正式訪問	1999.5.9-5.15
9 唐家璇	外交部長	正式訪問	1999.12.10-12.12
10 朱鎔基	總 理	正式訪問	2000.10.17-10.22
11 李 鵬	委 員 長	正式訪問	2001.5.23-5.27
12 唐家璇	外 長	正式訪問	2002.8.2-8.3
13 錢其琛	副總理、中国政府特使	友好訪問	2003.2.24-2.26

資料：中国外交部公表資料

## 中国—北朝鮮要人往来一覽

### 1. 北朝鮮要人の訪中

金日成	首 相	正式訪問	1953.11.10-11.27
金日成	首 相	友好訪問	1954.9.28-10.5
金日成	首 相	友好訪問	1958.11.21-11.28
金日成	首 相	友好訪問	1959.9.25-10.3
金日成	首 相	友好訪問	1961.7.10-7.15
崔庸健	委員 長	正式訪問	1969.9.30-10.3
許 鎔	外 長	正式訪問	1973.2.9-2.14
金日成	主 席	友好訪問	1975.4.18-4.26
李鐘玉	総 理	正式訪問	1981.1.10-1.14
金日成	主 席	国事訪問	1982.9.16-9.25
金正日	書 記	非正式訪問	1983.6.2-6.12
金永南	副総理兼外長	正式訪問	1984.2.7-2.14
姜成山	総 理	正式訪問	1984.8.5-8.10
金日成	主 席	非正式訪問	1984.11.26-11.28
金日成	主 席	正式友好訪問	1987.5.21-5.25
李根模	総 理	正式友好訪問	1987.11.9-11.14
金永南	副総理兼外長	正式訪問	1988.11.3-11.7
金日成	書 記	非正式訪問	1989.11.5-11.7
延亨默	総 理	正式訪問	1990.11.23-11.28
金日成	主 席	正式友好訪問	1991.10.4-10.13

[92.09]

1 金永南	委員 長	正式友好訪問	1999.6.3-6.7
2 白南舜	外 務 相	正式友好訪問	2000.3.18-3.22
3 金正日	総 書 記	非正式訪問	2000.5.29-5.31
4 金正日	総 書 記	非正式訪問	2001.1.15 -1.20
5 金潤赫	最高人民会議秘書長	友好訪問	2001.7.10-7.14
6 楊亨燮	最高人民会議常任委員会 副委員長	国家代表团	2002.10.15-19

### 2. 中国要人の訪朝

周恩来	総 理	友好訪問	1958.2.14-2.21
劉少奇	主 席	友好訪問	1963.9.15-9.27
周恩来	総 理	正式友好訪問	1970.4.5-4.7
姬鵬飛	外 長	友好訪問	1972.12.22-12.25
華国鋒	党主席、総理	正式友好訪問	1978.5.5-5.10
鄧小平	党副主席、副総理	友好訪問	1978.9.8-9.13
趙紫陽	総 理	正式訪問	1981.12.20-12.24
胡耀邦	党 主 席		
鄧小平	党副主席	非正式訪問	1982.4.26-4.30
吳学謙	外 長	正式訪問	1983.5.20-5.25
胡耀邦	総 書 記	正式友好訪問	1984.5.4-5.11
胡耀邦	総 書 記	非正式訪問	1985.5.4-5.6
李先念	主 席	友好訪問	1986.10.3-10.6
楊尚昆	主 席	友好訪問	1988.9.7-9.11
趙紫陽	総 書 記	正式友好訪問	1989.4.24-4.29
江沢民	総 書 記	正式友好訪問	1990.3.14-3.16
李 鵬	総 理	正式友好訪問	1991.5.3-5.6
錢其琛	國務委員兼外長	正式友好訪問	1991.6.17-6.20

本誌『蒼蒼』休刊について

本誌『蒼蒼』は、一九九三年の創刊以来、双月刊で刊行しつづけて二〇年を経て、本号で一―三号を数えています。ここまで来られたのは、身銭を切っていた読者諸氏とタダ原稿を書かれた執筆者のお陰と、心から感謝しております。しかし、世はパソコン全盛時代でパブリケーションに一大変革が起こっており、紙ツブテを電子ツブテに発展させる必要を痛感しておりましたが、ようやくチャンスらしきものを把握したので、次号(一一四号)、次次号(一一五号)を刊行した後、お休みさせていただきます。

『蒼蒼』休刊後に読者諸氏には、21世紀中国総研の発足に伴い新たに創刊されるメールマガジン『21世紀中国』を配信する予定です。メールマガジン『21世紀中国』は、『蒼蒼』の定期執筆者の矢吹晋先生を初めとする21世紀中国総研の創立メンバーが中国の諸問題について論じるオビニオン・マガジンです。パソコンを操らない定期購読諸氏には、『21世紀中国』のプリントアウト版を蒼蒼社の負担に継続配布して、ご迷惑をかけないように配慮する所存です。

詳しい計画案は次号で明らかにしたいと思います。ですが、忌憚のないご意見をお寄せくださいますようお願い申し上げます。(中村公吉記)

蒼蒼社編集部編 横浜産業振興公社編集協力

# 上海経済圏情報

驚くべき成長を遂げる上海及び長江デルタ諸都市の投資環境情報を満載。

A 5判 450 頁 定価：本体 3,000 円+税 5% 11 月刊行予定

<b>第I部</b> 上海及び上海経済圏	<b>第2章</b> 浙江省の産業集積
第1章 上海市、江蘇省、浙江省	第3章 江蘇省の産業集積
第2章 上海市、江蘇省、浙江省の政治機構と指導者	第4章 民間企業の台頭
第3章 上海の日本人	<b>第V部</b> 上海経済圏の開発区と外資企業
<b>第II部</b> 上海経済圏の経済データ	第1章 上海経済圏における企業誘致と産業集積
第1章 上海経済圏の発展	第2章 上海市の開発区と外資企業パワー
第2章 上海経済圏の中国経済に占める地位	第3章 江蘇省の開発区と日系IT企業
第3章 上海の貿易と対日貿易	第4章 江蘇省の開発区と民間企業家
第4章 上海、北京、天津、広州の第10次5年計画(旧版を流用する)	第5章 輸出加工区
<b>第III部</b> 上海の産業動態	<b>第VI部</b> 上海の日系外資企業
第1章 上海工業の未来図	第1章 上海経済圏の日系企業の分布
第2章 上海の自動車産業	第2章 日系グローバル企業の対中戦略
第3章 上海及び上海周辺のIT産業	第3章 上海経済圏の日本企業の注目企業
第4章 上海及び上海周辺のアパレル産業	第4章 横浜企業の上海経済圏への進出
第5章 上海の銀行、証券、保険業	<b>附録</b> 上海の情報源
第6章 上海の小売業	第1章 ホームページ
第7章 上海の物流事情	第2章 新聞・雑誌・書籍
第8章 上海港湾の発展	第3章 公館・公共団体・報道機関
<b>第IV部</b> 上海経済圏の産業集積	第4章 弁護士・医療機関など
第1章 上海経済圏の産業力	